

『ソーシャルインクルージョン』

大阪市社会福祉研修・情報センターでは、市民や福祉関係者などを対象とした社会福祉講演会を開催していますが、平成19年度は共通テーマを『ソーシャルインクルージョン (social inclusion)』としました。今回の特集では、4回に渡って開催された講演会の内容を振り返って、『ソーシャルインクルージョン』の理念を再確認します。

センター関係者が語る、この1年

Q この理念はどこから生まれてきたのですか

もともとはイギリスやフランスなどのヨーロッパ諸国において、近年の社会福祉を再編するにあたり、その基調とされている理念です。貧困者や失業者、ホームレスの人々など社会から排除された人々として捉えて、彼らの市民権を回復し、再び社会に参入させることを目標としており、その実現に向けて公的扶助や職業訓練、就労機会の提供等が総合的に実施されています。1988年に施行されたフランスの参入最低限所得法などは、この理念を端的に示しています。この法律は、社会から排除されている人々の社会的及び職業的参入を図るため、最低限所得を保障することで、排除された人々を社会的に再統合することを目的としています。^(*)

日本では平成12年に厚生労働省が発表した「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会報告書」において、初めて公式に取りあげられた言葉です。まだ、福祉関係者の間でもあまり浸透しているとはいえませんが、これからの社会福祉の展開を考えるときには基調となるひとつの考え方だと思えます。

Q もう少しわかりやすく説明してください

インクルージョンとは「包み込む」あるいは「包含する」ということで、分かりやすくいえば「社会的に包み込む」という意味です。

私たちが生活するこのまちには、貧困やホームレス状態に陥った人、障がいのある人、制度の谷間にあって社会サービスの行き届かない人など多様な人々がいます。そういった人達をそのままにしておくのではなく、ともにまちを構成する一人だと考えて、無視しない、排除しない、包み込むように接していこうという考え方でよいと思います。さらに、そこから発展させてまちづくりを行っていこうという意味もあります。

Q では、共通テーマとして選んだ理由は?

講演会は、これまで地域福祉や自立支援をテーマに実施してきました。19年度の共通テーマを決めるにあたり、社会情勢として、格差社会や貧困、ホームレス、そして児童・高齢者の虐待などが社会問題となっていました。これらの問題は、とすれば「自分には関係のないこと」と関わりを避けたり、無関心になりがちですが、私たちが生活していくうえでは本当に身近な問題だと思えます。これらの問題をインクルージョン(包み込む)という共通テーマで実施しました。講演会は、広く市民の方や福祉関係者に参加を呼びかけていますので、一緒に考えて行ければとの理由からです。

今すぐ読める 『ソーシャルインクルージョン』 関連の書籍

大阪市社会福祉研修・情報センターの2階にある図書・資料閲覧室では、『ソーシャルインクルージョン』に関連した図書やDVDや図書を多数取り揃えてあります。今回はその中から理解に役立つものをご紹介します。(図書・資料閲覧室のくわしい情報はP.9をご覧ください)

図書 『ソーシャルインクルージョンと社会起業の役割 地域福祉計画推進のために』

炭谷茂 著 大山博 著 細内信孝 著
ぎょうせい 2004年

「地域福祉計画」の策定が自治体に義務付けられ、その「地域福祉計画策定指針」の柱に掲げられています「共に生きる社会づくり(ソーシャルインクルージョン)」を具体化していくための、先進事例を掲載した、わが国初の実践的な手引書です。



図書 『ソーシャル・インクルージョンの 社会福祉—新しい“つながり”を求めて』

園田 恭一 西村 昌記 編/著
ミネルヴァ書房 2008年

社会福祉におけるソーシャル・インクルージョンの取り組みを通して、新しい“つながり”と共に生きる社会を標榜する「これからの社会福祉」のあり方を提案します。



ン』という考え方

Q 今回の講演会の反響は いかがでしたか？

「ソーシャルインクルージョン」という考え方が初めて、という方が多かったですね。講演会後のアンケートでは「初めてこの考え方を知りました。大事な考え方なのでもう少し勉強してみます」「今日はとても勉強になりました」と答えてくれた方もあり、みなさん前向きにとらえてもらえたようでした。

Q 今後、この理念が社会に 広がっていくことにより、 どのように変化を期待しますか

いま大阪市では、すべての区において地域福祉推進のためのアクションプランが動いています。これは社会情勢や生活様式、そして意識の変化等により失われた「人々のつながり」を再構築するという側面ももっています。私たちが生活するときには、この「つながり」がとても大切になります。そのときに、この「ソーシャルインクルージョン」の理念が生きてくるのではないかと思います。

いま援護が必要な状態の人、自分とは価値観の違う人に対して無関心でない、排除しない、まちづくりをすすめていくことが大切だと思います。

Q 平成20年度の社会福祉講演会の 共通テーマは何でしょうか

「人材養成」です。大阪市では、福祉に関係する福祉施設、職能団体、大学等の教育機関、そして行政、社協が地域福祉推進のための人材養成を進めるための「福祉人材養成連絡協議会」を結成し、さまざまな事業や仕組みづくりを進めています。

今年度で取りあげた「ソーシャルインクルージョン」の理念を大切に、大阪市の人材養成に役立つ講演会を実施していきます。

(*1)平成12年 厚生労働省発行「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会報告書」より一部引用

図書 『ソーシャル・インクルージョン 格差社会の処方箋』

日本ソーシャルインクルージョン推進会議 編
中央法規出版 2007年

格差社会においてますます顕著になっている弱者の社会的排除。本書は、縦割りの施策ではもはや対処しきれないさまざまな問題に対し、ソーシャル・インクルージョンを基軸に、理論と実践の両面から提言を行っていきます。



DVD 社会福祉法人 一麦会「麦の郷」 ソーシャルインクルージョン への挑戦

大橋謙策 監修 丸善 2006年

社会福祉法人一麦会「麦の郷」は、和歌山市西和佐地区を中心に、地域に必要な社会資源づくりの運動を今日まで四半世紀にわたって進めています。そんな地域住民の支援をエネルギーとした先駆的な実践を描いた作品です。

2007～8年にかけて 4回の講演会を行いました。

社会福祉講演会(2007年9月28日開催)

講師: 関 宏之

(大阪障害者雇用支援ネットワーク代表理事、広島国際大学医療福祉学部教授)



「ヘレン・ケラーさんとの出会い～忘れてはならないこと～」をテーマに、日本にも3度訪れたことがあるヘレン・ケラーさんの生い立ちや功績についてお話しいただきました。ヘレン・ケラーさんと福祉の関わり、福祉にかける情熱から「ソーシャルインクルージョン」についての理解を深めていきました。受講生へのアンケートでは「障害者を特別視することなく、同じ弱い面を持った人間同士としてたがいに支え合って生きていく姿勢が必要だということ、「ソーシャルインクルージョン」について再認識し、今後の活動に活かしていくことを決意することができました」といった前向きな回答が多く見られました。

●ウェルおおさか 2007年12月号、2008年1月号に2話完結で掲載

社会福祉講演会(2007年10月31日開催)

講師: 野沢 和弘

(毎日新聞夕刊編集部部長、全日本手をつなぐ育成会理事、千葉県障害者差別をなくすための研究会座長)



「障害者が地域を変える」をテーマに、平成19年7月より千葉県で施行されている「障害者の差別をなくす条例」ができていくまでの過程をお話しいただきました。講師自身が障害者の家族であり、また条例成立に向けて奔走した中心人物の1人。そんな経験に基づいた話は聴衆たちの心に強く訴えかけるものがあり、「心に響く講演だった」「障害者の差別禁止の条例は大阪にも必要。ただ感動しただけで終わらず自分の立場で何ができるのか」といった感想が多数集まりました。「ソーシャルインクルージョン」の考え方のひとつである「無関心ではいけない」をもとにお話しされた講演でした。

●ウェルおおさか 2008年2月号、3月号、4月号に3話完結で掲載

社会福祉講演会(2007年11月13日開催)

講師: 橋本 和明

(花園大学社会福祉学部臨床心理学科教授)



「児童虐待からみえてくるもの」をテーマに、児童虐待が起こる原因やトラウマといった心の傷についての講演会。虐待のメカニズムについての解釈や、虐待を包括的に捉えて考える大切さなど、さまざまな人間関係が要因として挙げられる児童虐待について、ソーシャルインクルージョンを介して深く考察しました。「包括的に捉えて虐待を考えることが、今後の職務に活かせるように思います」などの意見が多かったです。

●ウェルおおさか 2008年5月号に1話完結で掲載

社会福祉講演会(2008年2月28日開催)

講師: 炭谷 茂

(日本ソーシャルインクルージョン推進会議代表)

本年度のテーマである「ソーシャルインクルージョン」を総括する講演会。「ソーシャルインクルージョンの思想と実践～つながりのもてるまちづくりのために～」をタイトルに、これからの地域は具体的に何をしていくべきか、といった内容をお話しいただきました。

●ウェルおおさか 本号P.3～4に1話完結で掲載

ソーシャルインクルージョンの 考え方や実践について 炭谷茂先生にお話しいただきました

今回、掲載する講演録は、前ページの4回にわたる講演をまとめる形として、日本ソーシャルインクルージョン推進会議代表である炭谷茂氏にお願いし、「ソーシャルインクルージョン」の考え方や実践について語っていただいた内容をまとめたものです。ともに「ソーシャルインクルージョン」に対する理解を深めていきましょう。

ソーシャルインクルージョンは 単なる啓発教育活動ではない

私はソーシャルインクルージョンの理念について学んでいるわけですが、正直言うとまだ「ソーシャルインクルージョンとは何か」ということさえわかっていません。もちろん、理屈ではわかります。貧困者や失業者、あるいは外国人の人たちは地域社会の中から排除されやすい。そんな人たちを差別せず、みんなで仲良く暮らそうという理念。でもそれだけなら国家のトップ政策になることではないと感じるのです。そこで重要なのは、ソーシャルインクルージョンは、単なる啓発教育活動ではないということなのです。つまり、外国人差別やホームレス差別をやめましょうだけではいけません。

私がおのことに気付かされたのは、平成13年10月にイギリスから「CAN(キャン)」という団体呼んだときです。「CAN」というのは、「コミュニティ・アクション・ネットワーク(Community Action Network)」の頭文字を取ったもので、インターネットで彼らのホームページを検索しますと、そのトップには「CANはソーシャルインクルージョンを実現するための団体です」と出てきます。私はとりあえず「CAN」を呼んで勉強をすれば何をすればいいのかわかるのではないかと思います、中心人物のアンドリュー・モーソンをはじめ5人を大阪に呼ぶことにしました。

スラム街を見事に復興させた、 「CAN」のミラクル手腕

「CAN」がこれまで何をしてきたか、少し説明をしましょう。これはブロムレイ・バイボウというイギリスで2番目のスラム街を立て直した際の物語です。

ブロムレイ・バイボウは、ロンドンの東側にあり、約50カ国の移民から成り立っているスラム街です。アンドリューは、まずそこに教会の牧師として入り込みました。その頃、すでに失業率が40%程度。「とにかくこの失業状態を改善しなくては」と考えた彼は、まず公



講師◎日本ソーシャルインクルージョン推進会議代表、
財団法人日本休暇村協会理事長

炭谷茂

園の整備に取りかかります。当時、街の中心にある公園はとて荒れていて、覚せい剤の取り引きや売春が行なわれたりする犯罪の巣でした。公園をきれいにする事で「普通に人が入ってくるようにしなくては」と考えたわけです。そして公園整備の仕事をしてもらうのに、失業者の人たちを雇い、賃金を払うようにしました。

たしかに「仕事」には、人を結びつける力があるのです。失業者たちはこれまでおたがい同じスラム街にいても、隣の人が何をしているかよくわからなかったのです。けれども「仕事」をすることによって顔を合わせる。すると「あっ、あなたが隣に住んでいる人ですか」ということで「つながり」ができてくる。アンドリューは、これこそまさにソーシャルインクルージョンだということなんです。そして公園整備が進んでいくと、今度は、今まで怖くて公園に来なかった高齢者や子どもたちが遊びに来るようになりました。するとまた、公園を通じた人と人の「つながり」ができるようになっていったのです。

喫茶店にバレエ教室……。 斬新なアイデアで福祉を実践

次に、アンドリューは喫茶店を始めました。もちろん従業員は40%の失業者の中から雇います。すると今度は喫茶店に人が集まってきました。その地域で、今まで会話をしたことのない人どうしが、自然に会話できる環境ができ上がったのです。

さらに今度はバレエ教室を始めました。実はこのスラム街には

かつてバレリーナとして活躍していた人が住んでいたのです。もちろんその人に先生をやってもらいます。この時点でその人にも給料が払えるようになりました。やがて、スラム街でブラブラしていただけの女の子が次々とバレエの指導を受けに来るようになり、その生徒のうち一人が才能を見出され、ついに世界で2番目とされる英国のバレエ団の主演に抜擢されるようにまでなりました。

スラム街に住む人たちは、少し前までは自分たちの仲間だった女の子がテレビで活躍しているのを見ることで励まされ、自信が付き、さらに強く地域が「つながり」で結ばれていったのです。こうして英国でも2番目のスラム街と言われたプロムレイ・バイボウは、見事に立ち直ったのです。

「CAN」の特色と言える、4つの方法論を学ぶ

この話を聞いた時は衝撃的でした。「こんなことが本当に福祉なのか」と思いました。でもアンドリューは、これをやることによって失業をなくせると判断したのです。そして現実には、40%の失業率はたちまちのうちに数パーセントと、英国でもかなり低いほうになったのです。さらに仕事を通じて、あるいは喫茶店やバレエ教室を通じて、人との「つながり」という面でも成功を取っています。

このような「CAN」の活動から、学ぶことは4つほどあります。

ひとつは、社会的起業家としての立ち位置。つまり、これまでの福祉というのは、公からお金をもらってきてやる、もしくは金銭を寄付するぐらいのものでした。たとえば、ホームヘルプのようなサービスを行なうことが福祉だったわけです。けれども、彼のやり方はそうではなくて、目的として、なんとかこの失業をなくしたいというやり方だったのです。これを金銭の寄付でやるのではなく、仕事として進めていく。つまり起業家、わかりやすくいえば、普通のビジネス的な手法でやる。それが社会的起業という考え方なのです。これが私の目には非常に斬新に映りました。2番目には、ニーズ本位だということです。これは英国の福祉の特色だと思います。この地域で仕事をする、あるいは社会との結びつきを強めることが必要。そう決めて、そのために必要なことをやっていくのです。

3番目には、あらゆるものを利用したということです。たとえば、公園整備をするにしても給料は払うわけです。この給料、どこから出てきたのかなど。もちろん教会から出てきたわけではなくて、アンドリ

ューは、そこで必要な経費はみんな、区立の公園でしたから区に回すのです。そう、区からお金を取ってくるのです。とにかく利用できるものは何でも利用してやろう、というしたたかさがあったんじゃないかなと思います。それに加えて4番目。住民がみんな参加しているという点に、彼のやり方の特色があるのではないのでしょうか。これらの4つがアンドリュー・モーソン、つまり「CAN」の特色であると私は思います。

ノーマライゼーションの延長にソーシャルインクルージョンが見える

最後に「ソーシャルインクルージョンに基づくまちづくりの全体像」について整理をしたいと思います。今、どういうニーズに対応しなければいけないのかといった場合、まず大切なのは問題の認識。その問題についても法律や予算にとらわれずに考えなくてはいけません。私たちは、福祉ニーズというものは、どうしても法律や予算に基づいてとらえてしまいます。でも世の中には、予算や法律にないものがたくさんあるのです。2番目に問題のとらえ方として、社会との関係性を考えなくてはいけません。これは排除と孤立という問題だろうと思います。どうも新しいニーズというのは、これまでの社会福祉のとらえ方では不十分で、社会から排除されている、または孤独死のように社会から孤立している、そういう社会との関係性の問題でとらえなくてはいけません。3番目として、これが重要と思うことに「貧困」があります。日本人は少しずつ貧困ということ忘れてきたわけですが、最近、この貧困層がじょじょに増え始めているんじゃないかと。つまり貧困を考えないと、この社会問題というのはなかなかとらえにくくなっているのではないかと思うわけです。

今、重要なのは、これらの認識を前提にソーシャルインクルージョンという理念を中心にすえていくことでしょう。ノーマライゼーションとの相違についてよく質問されるんですが、実はノーマライゼーションもソーシャルインクルージョンも、そう違いはないという気がしています。いわばノーマライゼーションが発展した方向にソーシャルインクルージョンがあるのではないのかという思いからです。ノーマライゼーションは障がい者を中心にして考えるのですが、ソーシャルインクルージョンは障がい者だけではなく、たとえば外国人、ホームレス、それから刑余者の問題など、社会から排除されている多くの問題をとらえていなくてはならないからです。(了)

※この稿は平成20年2月28日に大阪市社会福祉研修・情報センターで開催された「平成19年度 第5回・社会福祉講演会」の講演内容の聴き取りから抜粋、再構成したものです。